

佐野経彦と神理教の 思想史的位置づけと教義に関する考察

— 国学・医道と実践的古神道観に着目して —

小林 栄太

2026 年 8 月 4 日

目次

1. はじめに.....	2
2. 佐野経彦の知性と神理教の背景.....	2
3. 「医者」かつ「国学者」であった知性 — 神秘体験に完全に依存しない姿勢 —.....	2
4. 「本教大意」「御教誡」に見る実践的倫理と「拝む」ことの真義.....	3
4.1 日常生活に密着した実践的道德・倫理.....	3
4.2 古神道における「拝む」ことの本質.....	3
4.3 自らを祓い清める、そして祖霊（産須根神）の安らぎ.....	4
5. 結語.....	4
5.1 謝辞.....	4
6. 参考文献.....	5

1. はじめに

私は、代々神道の家系に生まれ、幼少期からごく自然に「神道」や「神」という存在が身近にある環境で育ってきた。しかし、あまりにも日常に溶け込んでいたがゆえに、かえってその本質や教義について深く関心を持つことはなかった。だが成長するにつれ、何か特別な不幸があったわけではないものの、「そもそも宗教とは何なのか」「神道とは何を教えとし、神とはどのような存在なのか」という本質的な問いが自分の中で芽生えるようになった。

そうした中で探求を進めるうちに、私が信仰している明治期に立教された教派神道の一派「神理教」と、その初代管長、「佐野経彦」に強い関心や興味を持ったのである。

佐野経彦は、^{ニギハヤヒノミコト} 饒速日尊・^{かんなぎべ} 物部・巫部の格式高い古代の血脈を引くとされ、国学者であり同時に医者でもあった。

一般的に神道といえば、神秘的な儀式や神懸かり的な霊験（いわゆる神秘体験）が強調されがちである。しかし、彼の説いた教えは、単なる神秘主義にとどまらず、非常に理論的かつ実用的な生活倫理に満ちていた。

そこで本研究（考察）では、神道の家に生まれた私自身の主観的・客観的な視点を交えつつ、神理教の教義や佐野経彦の思想構造を紐解いていく。そして、古代の伝統継承と近代的な知性が融合した神理教の独自性を分析し、現代社会における神道思想のあり方について、解釈を試みることを目的とする。

2. 佐野経彦の知性と神理教の背景

神理教を理解する上で欠かせないのが、創始者（初代管長）である佐野経彦の人物像である。佐野家は古代の神事職能集団「巫部」の系譜をひく家系とされるが、経彦自身の最大の特徴は、幕末から明治という激動期において「医者」であり、同時に「国学者」でもあったという点にある。そして、佐野経彦は古典研究に取り組む一方、若い頃には医業にも携わった。こうした知的・実践的背景が、その思想形成に関係したと考えられる。

また、世襲を必ずしも望まず、実際に自らの知性と実践によって教えを打ち立てたことが、単なる神秘体験にとどまらない「神理教」の合理的かつ実践的な教義の土台となったと考えられる。

実際に、「御教祖」は世襲を潔く思われなかったようだが²と、教団のWebサイトに記載がある。

このように、医者・国学者という背景が、後に第3章・第4章で論じる実践倫理や「拝む」という思想とどのように結び付き、神理教独自の思想を形成しているのかを明らかにしていく。

3. 「医者」かつ「国学者」であった知性 — 神秘体験に完全に依存しない姿勢 —

幕末から明治時代に成立した宗教運動の一部では、病気の治癒が重要な救済実践の一つとなり、加持祈祷、神符、神水などを通じた宗教的治病が行われていた。当時は近代的な医療制度が十分に普及していなかったこともあり、人々が宗教的实践や民間信仰に救いを求める場合もあった。ただし、宗教的治病と医療との関係は教団ごとに異なり、すべての民衆宗教や教派神道が医療を否定していたわけではない。

こうした宗教的治病をめぐる時代状況の中で、佐野経彦が医者としての経験を有していたことは、彼の思想を考える上で重要な特徴である。

経彦の思想の根底には、彼が「医者」であり、西田^{なおかい}直養³に師事し、同時に古典を深く修めた「国学者」であったという二つの知的背景が強く影響していると考えられる。

第一に、医者としての現実主義である。

若い頃に医業に携わった経彦の医道は、祈祷と施薬を兼ねる「皇道医道」であったとされること⁴から、経彦は治療行為と宗教的実践とを、完全に対立するものとしては捉えていなかったと考えられる。また、当時の医学的知識に基づき、身体や疾病に向き合う実践的な経験を有していた。

ただし、佐野経彦が医療と信仰の併用を具体的にどのように説いていたかについては、今後、一次資料による検討が必要である。

第二に、国学者としての論理性である。

西田直養らに師事し古典研究を深めた経彦は、『古事記』をはじめとする古典や国学的知識を踏まえ、神理教の教えを体系的に説明しようとした。

これにより、神理教の教えは、日常生活において実践可能な倫理として説明されたと考えられる。

このように佐野経彦は、科学・神秘体験のどちらかを完全に否定するのではなく、「現実の科学・医学」と「神から受ける神徳⁵」を対立させずに捉える解釈をすることもできる。ここに神理教の思想である一つの特徴を見出すことができる。

4. 「本教大意」「御教誡」に見る実践的倫理と「拝む」ことの真義

4.1 日常生活に密着した実践的道德・倫理

まず、日常生活に密着した主な教えは、

- ・ 「家業を怠ることなかれ⁶」
- ・ 「政令⁷にそむくことなかれ⁸」
- ・ 「人は怒るとも己は怒ることなかれ⁹」
- ・ 「己の身の分限をわすゝことなかれ。¹⁰（自分の実力を正しく知り、身の丈にあったことをすることを忘れることなかれ。）」

という教えであると私は考える。

これらに共通しているのは、信仰を非日常の神秘体験や過酷な修行を求めるのではなく、「仕事・法規範・対人関係という日常の現実に適応し、心を調和させること」自体を神道の実践と捉える姿勢である。ここには、医者として人間の生老病死や社会生活を見つめてきた佐野経彦ならではの実践的・合理的倫理観が凝縮されていると解釈できる。

そして、単なる宗教的義務ではなく、現代にも通じる日常の実践倫理である。

4.2 古神道における「拝む」ことの本質

他宗教に馴染みのある人や一般の人から、よく「神道の人には普段どのような『祈り』をしているのか」と聞かれることがある。

しかし、神道における神前での行為は、一般的な「祈り(お願い事)」という言葉だけで表すには少し語弊がある。神道において重要なのは「祈る」こと以上に「拝む(おがむ)」という行為を理解する方が、その本質を捉えやすいと考える。

まず、私は主に以下の四つの要素から成ると考える。

- ・ 「感謝、つまり、神様の恩恵に感謝していることを伝える」
- ・ 「神々に対し、自らの心を直く、行いを正しくして務め、世のためひとのために善事をします」
- ・ 「報告(良いこと・悪いこと含め様々な出来事を偽りなく自分の好きな回数、好きなように伝える)」

- ・「祈願・安寧^{あんねい}」は特にイメージされやすいだろう。家族の平和、無病息災を願ったりする。

つまり神道における「拝む」とは、神様に一方的におねだり(いわゆる神頼み)をする受動的な時間ではなく、「能動的かつ対話的な時間」であると考察する。

4.3 自らを祓い清める、そして祖霊^{そせん}(産須根神^{うぶすねのかみ})の安らぎ

神理教における「祓い」の真義は、自分や祖先^{そせん}の過去での過ちや罪をできる限り消し去ることにあるのではないと考察する。

そして、すべての罪を祓いきることは不可能である¹¹と教えられてきた。

しかし、だからといって日々の祓いや拝むことが一概に無意味かと言えば決してそうではないと推測する。

「祖恩^{そおん}をわするゝことなかれ¹²」(ご先祖様からいただいた恩恵を絶対に忘れてはならない)とある通り神道、特に神理教においては祖霊^{そせん}を非常に大切にしている。

「本教大意」の中で、子孫が教えを守り実践することにより、たとえ黄泉国^{よみのくに}に繋がれ苦しみの中におり迷っている祖先でありても罪を月の大神¹³たちに許され、日界^{にっかい}に送り返してくださり、やがて日の大神¹⁴たちに子孫を守護する氏神(産須根神)へと導かれるという趣旨を説いている。

つまり、完璧に罪を祓いきることはできずとも、子孫が神々への感謝の心を忘れず、『本教大意』に「此道^{このみち}を置^{ほか}て外に道と云う道は更にあるべからず¹⁵」とあるように、この教えこそが生活の根幹であると心得て日々の道を守ること、そして参拝や祝詞を通じて自らを祓い清め、特に「吾心清々^{わがこころすがすが}し」という自分自身を清々しく整うことに努めること自体を含めた、これらすべてが複合的に合わさることにより、命の根源である祖霊の重荷を和らげ、その霊^{みたま}に安らぎをもたらすのである。

5. 結語

私は実際に神秘体験のようなものを複数経験したことがある。

その詳細については本稿の主題ではないため触れないが、このような経験を通して、神道の実践と人生との関係を強く実感している。しかし、この経験に対する受け止め方は、神理教の信徒であっても、宗教を信仰していない人であっても様々である。

神理教は、信仰のみですべてを解決しようとするのではなく、医学や現実社会との親和を尊重しながら、人としての心の在り方を説いている点に特徴がある。

本研究を通して、信仰とは現実から離れるためのものではなく、現実をよりよく生きるための指針として理解できるのではないかと考察する。

そして、宗教には多様な教えや実践が存在し、その社会的評価も様々である。

しかし、いかなる宗教であっても、その教えを自ら考えることなく盲目的に受け入れ、日常生活との均衡を失うほどに傾倒してしまえば、本来人を支えるはずの信仰が、かえって本人や周囲に負担をもたらすこともあり得る。重要なのは、教えの本質を理解し、感謝や善行を日々の生活の中で実践することであり、その積み重ねこそが神理教の説く、信仰の意義であると私は考える。

6. 参考文献

- 1 井上順孝「佐野経彦の思想形成」『東京大学宗教学年報』第3巻、1986年、1-19頁。
<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/30726>
- 2 神理教大教庁「信徒の祝詞」神理社 2006年、p.1~2
 - 2.1 同上、p.3~5
 - 2.2 同上、p.65
- 3 権 東祐. 神話解釈史から読み取る教派神道の宗教性：神理教を中心として. 佛教大学総合研究所紀要 = Bulletin of the Research Institute of Bukkyo University. (23):2016.3,p.47-62. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I027218274>
- 4 神理教公式サイト(2026年7月25日閲覧)
 - 4.1 <http://www.sinri.or.jp/history.html#gokyoso>
 - 4.2 <http://www.sinri.or.jp/history.html#kancho>
 - 4.3 <http://www.sinri.or.jp/doctrine.html>

- 1 御教祖とは、佐野経彦のことである。
- 2 神理教公式サイト「歴史」<http://www.sinri.or.jp/history.html#kancho>
(2026年7月25日閲覧)
- 3 国学者であり、神理教の初代管長である佐野経彦の思想形成に最も大きな影響を与えた師の一人。
- 4 権東祐「神話解釈史から読み取る教派神道の宗教性——神理教を中心として——」『佛教大学総合研究所紀要』第23号、2016年、50頁。権は、経彦の医道について「祈祷と施薬を兼ねたいわゆる『皇道医道』であったと述べている。
- 5 神々から授けられる恩恵・守護・御力を指す。本稿では、その神徳を受けることによって人間に育まれる精神性や徳性も含む意味で用いる。
- 6 神理教大教庁「信徒の祝詞」神理社 2006年 序文。
- 7 現代での「法律」などにあたるもの。
- 8 神理教大教庁「信徒の祝詞」神理社 2006年 序文。
- 9 神理教大教庁「信徒の祝詞」神理社 2006年 序文。
- 10 神理教大教庁「信徒の祝詞」神理社 2006年 序文。
- 11 巫部祐彦「自然の道 423」『神理雑誌・抜粋 令和8年3月号』神理教応援ホームページ、
<https://www.sinri-sub.com/shinriR8nen/R8-3gatsugou.html> (2026年7月31日閲覧)。「全て
祓えるものではないにしても、言霊の精粹である祓詞や唱え言葉や祝詞により、少なからず清明を保てます。」
- 12 神理教大教庁「信徒の祝詞」神理社 2006年 序文。
- 13 月夜見神(俗に言う、ツクヨミノカミ)をはじめとする、黄泉国を司る神々。
つきよみのかみ
- 14 天照皇大神(俗に言う、アマテラスオオミカミ)をはじめとする、現世の様々な動きを司る神々。
あまてらすすめおおかみ うつしよ
- 15 神理教大教庁「信徒の祝詞」神理社 2006年 p.4～5